

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34

京都橘女子大学図書館 小林倫道気付

(Tel) 075-574-4118

(Fax) 075-574-4124

第5回大学図書館員京都研究集会

 感想文
大特集!!

「そんな奴知らんなあ」なんて言わないで!!

田北 十生

去る11月10日の日曜日の午後、立命館大学びわこ・くさつキャンパスに僕はいた。なにしてたって？

キャンパスの一角にある庭園？を眺めていたんです。そこには色鮮やかに紅葉した木々がひっそりと立っていて、ベンチは勿論人影さえない。ただ、午後の光を一杯に浴びた植木たちが、本当にひっそりとたたずんでいるだけでした。

けれども、そんな風景に私は魅入られて、ぼんやり立っていました。そこに何か古里にも似たものを感じたのです。こうゆう日溜まりの中で死んでいきたいと、ふと、何の脈絡もなく思ったからです。優しい死神が手招きしているようでした。

僕は、死に場所を探してこのキャンパスを訪れたのか？

とんでもない！僕は同僚の小川氏にせつつかれて(?)大学図書館問題研究会の「インターネットのホームページを作る」研究集会なるものに参加するために来たのです。

ついでながら、自己紹介いたしますが、僕が「たきたかずお」です。「十生」と書いて「かずお」読みます。「十生」と書いても、よく「一生」にされてしまいます(9も少ない名前にされてしまう！)。

この9月に人事異動で経理課から図書館勤務になりました。勤務につくなり、同僚の小林氏から、研究会に入るように下辞され、入会申込書を渡されたのであります。しかし、机の抽斗の中にねんねさせていたのですが、これが、1ヶ月後に彼にばれてしまい、入会の羽目になってしまいました。といっても、嫌々入会しているわけではありません。彼がこの会の偉い方とはつゆ知らず、会費もまだ払ってない!?失礼いたしますが申し訳ありません。直ぐお支払いいたしますので会員の皆様よろしくお願い申し上げます。

目次

第5回大学図書館員京都研究集会特集

- (田北十生、小林直子)
(村上健治、土師裕子) …………… 1頁
大図研京都数珠つなぎ⑩ …………… 6頁

支部報に関するご意見は最寄の支部委員または編集気付(京都橘女子大学 ☎075-574-4113 (FAX 075-574-4122) ♥ PXX01651@niftyserve.or.jp またはNIFTY-Serve:PXX01651小林)まで

図書館に出勤するなり、「ライブラリアン」になったのだから言動に注意し、ブローカーな言動は慎むように先輩の女性主から忠告を受けました。どうも僕は「ラ」抜き人間、すなわち「ブラリアン」に思われているようです。!

えっ! 本題! すみません!

1時から5時まで充実した研究集会でした。講師の津田氏(こんな気安く呼んで良いのか心配ですが)の非常にわかりやすく親切なレジメと指導により「ホームページ」について、僕のようなものでも少しは理解できました。会費2千円だったけど5千円でも良いくらい。今後もこのような研修を沢山企画して欲しいと思います。特に僕のような新参者には嬉しい限りです。この感想文も小林氏に催促されて、今夜中の1時過ぎ、大好きな鈴木彩子の「罪」(BOROBOROというアルバムの中にある)という曲を聴きながら書いています(「GATEWAY2000」の「マルチメディアP5」シリーズ=これ凄いよ)。

研究集会の参加者の中で僕が一番年長者だったように思いますが、それでも、めげずにがんばって良い図書館員として成長したいと走り始めました。これからは、電子図書館なんて言われるとめまいがしますが、走り続けますので、よろしくご指導ご援助をお願いします。余談ばかりになって申し訳ありません。

(たきた・かずお/京都橘女子大学図書館)

うららかな秋の日

小林 直子

うららかな秋の日、いただいた地図を頼りに、立命館大学びわこ・くさつキャンパスに出かけました。立命館大学経由飛鳥グリーンヒル行きのバスの乗客は私一人だけでした。日曜日のキャンパスは静かで、鳥の鳴き声がよく聞こえました。緑が多くていいですね。

今年の研究集会は去年の続編とのことでしたが、私は昨年の研究集会に出席してないので少し心配でしたが、講師の先生が前半で、インターネットの基本的なことをおさらいして下さったので助かりました。自己流でやっていた何のことも意味の解らなかつたことが解るようになりました。例えば、URLの最後にindex.htmlとあるのはデフォルト名(代表名)であるとか、ある箇所(色が違う)をクリックするとそのリンク先にとんでいくというのは、座標を指定するように縦横の位置を指定しているのだそうで、そのへんは普通のプログラミングの基本的なことと同じなんだと思いました。その他、Javaってなんだろう、あの字が流れていくのがそうなのかなと思っていたのですが、違っていて、あれはJavaScriptというものなのでした。また、CGIや、Java, JavaScriptなどを、サーバーとクライアントとの関係で説明して下さったのがよかったです。

実習では、ネットスケープ・ナビゲーターはどの機械でも同じ(ですよ)だからいいとしても、機械により漢字変換や削除のしかた、その他諸々違うので慣れるまでは戸惑いました。htmlで書いているファイルとネットスケープ・ナビゲーターがうまく切り替わらないので、最初は本当に機械の調子が悪いのかと思ってしまいました。自分が間違えていたのです。後半はちょっと慣れましたが、htmlを書き換えても前と表示が変わらなくて変だなあと思っていたら再読み込みをクリックするのを忘れていたということもありました。実習例は自分について書いてみるということだったので、何を書こうか

考えているうちに実習についていけなくなりそうになり、焦りました。こういうときに照れと見栄がでてしまう。結局先生の例をほとんど真似てしまいました。

その他、文字の大きさの違いを実感したり、背景の色を変えたり、表を作ったり、時刻の表示の仕方、音声、画像、動画像のことも教えていただきました。リンク先に動画像を指定しても、読み込むためのプログラム？がないと動かないのだそうです。難しい。タグを挟み込む位置も考えなくちゃね。実習では先生方がまんべんなくまわってきてくださるので困ることもなく楽しめました。本当にありがとうございました。しかしわいわい言いながら実習するのは楽しいものですね。

さて楽しく帰途につき（川北さんありがとうございました）、落ち着いてから考えてみたら、今日習ったことを自分のパソコンでやってみようと思っても、やり方が全然わからないことに気づき、一瞬ショックを受けましたが、分厚そうなマニュアル本といい、タグ付けの大変さの話（を耳にする）といい、楽しいって言っているのも今のうちなのかもしれないなと思ったりします。OSについているMSワードの何とかをまず探して、それからhtmlエディタを探して、と。全然差し迫っていないから悠長なものですが、htmlにたどり着くまで長くかかりそうな気がします。

（こばやし・なおこ／京都大学法学部図書室）

「第5回京都研究集会」に参加して

村上 健治

「インターネットのホームページを作る」という副題にひかれて、今回の研究集会に参加しました。職場には、パソコンが多数設置され、その内の何台かにはWWWの閲覧ソフト「Netscape」がインストールされ、世界各地のホームページを見ることができるようになっていますし、かなりの大学図書館がホームページを公開しています。今年の全国大会でも「大学図書館とインターネット」分科会が開かれ、かなりの人でにぎわっていました。最近では小学生でもホームページを作成するとか、ややこしい文法をおぼえなくても簡単にホームページを作成することのできるソフトがある、とのことですが、個人的には興味をおぼえつつも、仕事に関わることのない限りホームページを作成する機会（+機械）はないものと思っていましたので、実際にホームページを作ってみるという今回の研究集会に興味をもって参加しました。

実際にホームページを作るまえに、WWWとホームページの関係について解説がありました。その中で印象に残っているのは、現在では、ホームページを作成するための文章（HTML: Hyper Text Markup Language）の規則が、ホームページの閲覧ソフト（Netscape）の機能の進化を後追いしているということです。最初は、HTMLの規則ができてからNetscapeの閲覧ソフトができたそうですが、その後はNetscapeで採用された機能を規則の方が後追いして規則化していつているそうです。例えば、ver 1. 0ではホームページの「背景」や「文字」の色は「灰色」や「黒」ぐらいだったそうですが、ver 2. 0では、青・赤・緑などの「色」を指定することができるようになっていきます。

ホームページの作成では、最初に「ワークシート」のようなものをパソコンに読み込んでから、講師の方の指示に従って「標題」として「標題」を入力し、「見出し」として「

見出し」を入力し、入力するたびにその結果をNetscapeで確認するという形式で進められましたので、特にとまどうこともなく自分のホームページを完成させることができました。HTMLの規則は思ったよりも簡単なもので、例えば「見出し」を入力する場合は、

```
<H1>見出し</H1>
```

と入力すると、計算機の方で解釈して「見出し」という言葉を「見出し」らしく表示してくれます。そのため、あまりレイアウトを気にすることなく、書きたい文字を適切な記号で囲んでいく（あるいは先頭に適切な記号を書いておく）とホームページを作成することができます。使用した機械はMacintoshでした。日頃はWindowsしか使っておらず、Macを使うのは今回が始めてだったのですが、使い方はほとんど変わりませんでした。漢字変換に慣れなかったことと、特殊記号（”や：など）をキーボード上で搜したことを除けば、ほぼ違和感なく使えました。

最後の講師のお話の中で、「情報」は情報のあるところに集まってくる性質をもっており、特定の情報をもつホームページには関係する情報があつまる傾向がある、という言葉が印象に残りました。ホームページの作り方も大切ですが、それよりも発信する情報の方が大切なのだということに改めて気付かされました。

(むらかみ・けんじ／大阪大学附属図書館)

「ホームページ」に初挑戦

土師 裕子

```
<HTML>
<HEAD>
<TITLE>*****(</TITLE>
</HEAD>
<BODY>
<H1>自己紹介</H1>
<H2><BLINK>岡山発</BLINK></H2>
<H3>所属</H3>
<UL>ノートルダム清心女子大学附属図書館</UL>
<H3>趣味</H3>
<UL>山歩き</UL>
. . . . .
</BODY>
</HTML>
```

岡山支部から参加しました。まだインターネットがそれほど自由に使える状況になく、立命館びわこ・くさつキャンパスにもあこがれて、京都研究集会に参加したのが1年前。今回は少人数と限定があったにもかかわらず、交流のない他支部の私でも受け入れていただき、貴重な体験をすることができました。

インターネット、ホームページ、WWW、Netscape、HTMLという用語は耳にしたことがあっても、なかなかピンときません。しかし、こうして継続して勉強会に参加したり、今回

のように実習をすると、きちんと知識が身につく、自分の理解も深まっていくのが実感できるのです。「自己紹介」とHTMLで書いた最初のラインをNetscapeで読み込んでみます。するとあのホームページといわれる画面が現れたではありませんか。「HTMLはホームページを記述する言語である」という、本に書かれている説明はこういうことだったのかと、難しいと思っていたコンピュータ技術の世界がとても身近かなものに思えました。HTMLに基づいて記述したファイルをつくれればホームページが作成できる。今日から「私も情報発信の仲間入り」と浮かれるのは、少し早すぎますか？

誰でも、どこからでも、いつでもしかも多くの情報を受発信することが可能になった技術の進歩はすばらしいものに違いありません。その集めた情報を必要なことや役立つことにきちんと利用できるようになりたいものです。何のために、誰に向かって、誰のためにどんな内容を発していくのか、集めていくのか、考えなければいけないようです。

帰りを急いだ私は、きちんと挨拶もせずユニオンスクエアを後にしました。とてもわかりやすく軽やかなテンポで講義を進めてくださった講師の津田先生や、企画と準備をくださった京都支部の皆さん、そして落ちこぼれそうになった私を両隣で助けてくださった大図研の先輩たちに、この場をかりてお礼申し上げます。

(はじ・ひろこノートルダム清心女子大学附属図書館)

5 支部合同新春例会のご案内

仮題 「情報リテラシーと図書館」

2月1日(土) 於 大阪市民学習センター (弁天町)

※ 時間や講師等の詳細は次号で、または別途ご案内します。

(☞前ページより)

次に招かれたのがマンسفエルト (Constant George Mansvelt 1832-1912。日本名=満斯歌児篤、蔓斯歌児篤) で、赴任期間は短期間でしたが教育や診療は熱心で病をおしてまで行ったそうです。病院長職が設けられたのもマンسفエルトの勧告でした。彼は次に大阪病院に転任しましたが、『病理各論』(大阪病院教師満斯歌児篤口述佐藤方朔訳。明治12年4月)や同じ訳者で『眼科要論』が時期を同じくして発行されています。

最後がショイベ (Henrich Botho Scheube 1853-1923。日本名=慕都胥乙辺) で日本の風土病の脚気に関心をもち、原因、症状、病理を検討し、明治14年(1881)5月に府下の医師に脚気について講演をしています。なお脚気については2冊の単行書を著しています。1冊は江坂秀三郎、武部隆太郎、半井澄訳『脚気病論全』(明治17年7月京都療病院蔵版。Die Japanische Kak-ke by Henrich Botho Scheube, Leipzig, 1882)。もう1冊は医科大学4年生賀屋隆吉(東大)訳述「脚気論」(Die Beribri-Krankheit. Eine geographisch-medizinische Studie by Henrich Botho Scheube, Jena, 1894)です。外国人教師達は多大な功績を残して本国に帰国しました。シーボルトの展覧会の展示品を観ながら、京都のこの時代に思いを寄せました。

さて、次は立命館大学経済学部の若井勉さん。どうかよろしくお願いたします。

